

沖縄の今

—粘り強い抵抗の中で

加藤 宣子

*動揺する仲井真知事

—辺野古への新基地建設、山場を迎える

今年3月22日に沖縄防衛局が辺野古の埋め立て申請を行なつてから、仲井真弘多沖縄県知事がどんな判断をするかが注目されてきた。今までは「県外がふさわしい」と言ってきた仲井真知事だが、11月1日の定例会見で、米軍普天間飛行場の名護市辺野古への埋め立て承認申請の判断について、名護市など関係者の意見や事務的な検討、法律上の適合性などを踏まえるとした上で「承認する、承認しない、その中間もあるだろう」と述べた。知事は「中間」の意味については明言しなかったが、希少種の保護や環境対策などの条件を付けた上で承認するという選択肢に初めて言及した（沖縄タイムス 11月2日より）。

埋め立て申請に関して「中間」「条件付き」とは、何らかの形で埋め立てを「行なう」ということで、新基地建設に反対する私たちからすれば、到底許せるものではない。「中間」という耳当たりの良い言葉に騙されてはいけない。現段階では、160haの埋め立てに2100万㎡（10トトラック350万台分）の

埋め立て土砂が運び込まれることになっている。予算は2300億円である。どんな条件がついたとしても、埋め立てが一度始まってしまうえば、辺野古・大浦湾のジュゴンや海ガメが棲みサングのひろがる豊かな生態系が壊され、さらに基地として使われて多くの命が失われる戦争につながっていく。

*日米安全保障協議委員会2+2で、辺野古への移設を再確認

順序は逆になるが、10月3日、アメリカからヘーゲル国防長官とケリー国務長官が来日し、岸田文雄外務大臣と小野寺五典防衛大臣と日米安全保障協議委員会（2+2）を開いた。沖縄の人々の抵抗で見通しの立たない普天間基地移設問題に関して、キャンプ・シュワブ辺野古崎地区への移設が普天間飛行場の継続的な使用を回避するための運用上、政治上、財政上および戦略上、「唯一の解決策」であることを確認。両政府の強いコミットメントを再確認。米国は、2013年3月の日本政府による沖縄県への公有水面埋立承認願書の提出を含む最近の進展を歓迎（共同声明より）。2+2後の段階では、仲井真弘多知事は「地

元の理解が得られない移設案の実現は事実上不可能だ」と強調し、県外移設を求める考えを表明していた。稲嶺進名護市長も「沖縄の政治的な環境、世論などを鑑みても推進できる根拠は全くないことを自覚、認識すべきだ。両政府とも思考停止の状態にあるのではないかと厳しく非難した。

*名護市長選の動向と市民の意見2500件

仲井真知事が「県外」の理由として挙げている「地元名護の反対」。その名護での市長選が来年1月19日に行なわれる。辺野古基地建設反対派の稲嶺進現市長は早々に立候補を決めたが、推進派・承認派はまとまっていない。現時点で基地建設推進派の島袋義和前市長と承認派の末松文信自民党県議が立候補を表明している。一本化も画策されているかもしれないが、今のところはまとまっていない。島袋氏は「辺野古移設なくして北部の振興発展はない」との主張を前面に打ち出し、基地従業員の市民優先採用などの政策を掲げる。11月10日末松氏は「知事が埋め立て申請を承認すれば、自身も承認する」と表明した。7月の参議院選挙では社大党の糸数慶子氏が勝ち、沖縄の基地建設反対の民意を示したが、名護では自民党の安里政晃氏にわずか150票差だったことを考えると、今回の選挙で稲嶺進市長が勝つのは簡単ではない。さらに、選挙に負けても、島袋氏と末松氏の合

計の得票が稲嶺氏を上回ることがあれば、それは「辺野古容認」の民意の表れととられるという人もいる。しかし、名護市が市民に呼びかけて集めた市民の意見は2500件に上り、そのうちの99%が基地建設に反対の意見だった。11月22日から名護市臨時市議会が行なわれ、11月末には名護市の意見が知事に提出される。

*** 普天間ではオスプレイ配備反対、**

高江ではヘリパッド建設反対、粘り強い抵抗が続く

昨年10月と今年9月末までに、普天間飛行場に計24機が配備されたオスプレイ。昨年9月には普天間基地を3日間封鎖するという強い抵抗のなか配備されてしまったが、今でも大山ゲートや野高ゲートでは毎日「マリーンズ・ゴー・ホーム」と抗議が続いている。

高江ではヘリパッド建設が続行中で、住民は厳しい闘いを強いられている。国が抗議する市民を訴えるSLAP訴訟も起こされている。そんな中、高江を撮った三上智恵監督の「標的の村」が全国で上映され、マスコミが全く報道しない高江の状況が少しずつ全国に知られてきている。

辺野古の闘いは、始まってもう17年、2004年4月19日のボーリング調査を体張って止めてから、何と3495日目になる(11月12日現在)。4年前の建設反対の名護

市長の当選、沖縄県議会での全会一致での建設反対決議、9万人参加の県内移設反対の県民大会の開催、そして今年1月の41全市町村長と市町村議会の連名による県内移設の断念を求める建白書の提出と、沖縄県民は「オール沖縄」で反対してきた。そして沖縄だけでなく日本本土・アメリカ・世界中の多くの人の反対の声によって、ここまで基地建設を止めてきた。これからが正念場である。ヘリ基地反対協議会の安次富浩さんは「私たちがあきらめなければ変わっていきます。17年前に自民党も公明党も基地建設推進賛成だったのに、今は反対ですよ。しっかりした世論をつくっていけば変わるわけです。私はその意味で悲観はしません。ただ前進あるのみで

運動の現場から

受け継いだふるさとと上関原発

***「八木の干潟」との出会い**

20代の私たちに残された豊かな自然は、あとどれくらいあるのだろうか。そして、どれだけの次の世代へ受け継げるだろうか。私たちは、高度経済成長期に便利さと引き換えに失ってしまった本来の自然の豊かさを知らない。その事に興味を持ったのは、ある生き物との出会い

す。闘いをつくっていく。そのことよってしか現状変革はできません」(沖縄意見広告11月2日集会)と言っている。私たちもあきらめることなく、新基地建設、特に埋め立てに反対していこう。

辺野古への基地建設を許さない実行委員会が、11月末までの辺野古の埋め立てに抗議する緊急署名を集めている。県知事あて及び、防衛大臣あての署名には是非ご協力頂きたい。
http://www.jca.apc.org/HHK/NoNewBases/13NNB/11_9_2.pdf

(かとう・のりこ/辺野古への基地建設を許さない実行委員会)

岡田 和樹



いがありました。私が生まれ育った広島県三原市は瀬戸内海に面し、沖合には有竜島という小さな島があります。そこにはナメクジウオという生き物が生息し、減少してきてとても貴重であるという事を小学一年生の時に学校で聞かされていました。実物を見たのは、中学生の頃です。その島で潮干狩りをしていた時に、その小さな生き物が砂から飛び出し